

教育部会用自己点検・評価報告書（様式1）

全学共通教育についての自己点検・評価報告書（教育部会会）

教育部会名：農学

部会長名：白井 康仁

作成者名：白井 康仁

概要（2000字）

平成28年度、農学教育部会では、第1Qに「食と健康A」を、第2Qに「食と健康B」を、第3Qに「食と健康A」「生物資源と農業A」「生物資源と農業C」を、第4Qに「食と健康B」「生物資源と農業B」「生物資源と農業D」を担当した。それぞれ、2～4名の教員によるオムニバス形式で、以下のような内容の講義を行った。

「食と健康」では、人の「健康」と密接に関係する「食」を科学的視点でとらえて行われてきた「学問的成果」の中から、今後持続可能な開発・発展を進めていく上で重要な事項について幅広く理解を深めるために、Aでは植物の機能性、遺伝子組み換え作物、微生物、食品などを、Bでは動物性食品、腸内環境、農薬などの講義をした。

一方、「生物資源と農業A」では、まず農耕の起源について、西南アジア、中国、中南米および日本を例にして述べ、次に栽培植物が生まれる機構ならびに栽培イネおよびトウモロコシの起源と栽培化に関与する遺伝子について解説した。さらにイネの品種改良の歴史ならびに近年における多収性品種や良質・良食味品種などの育成について述べた。また、酒造の方法および酒造好適米の性質と育種について説明した。「生物資源と農業B」では、新種が誕生するには？という基礎的な内容から、品種改良の材料としての野生種の探索とその遺伝資源としての評価までという応用研究についても紹介した。また、交雑育種や一代雑種育種等の近代育種の方法論についても説明した。さらに、メンデル遺伝やセントラルドグマ、ゲノムプロジェクト等分子生物学的な研究の動向についても説明し、これらの成果がどのように農作物の育種に関わっているかについて説明した。「生物資源と農業C」では、農業とこれらをめぐる諸問題について多面的に理解する力を身につけることを目標として、農業上重要な昆虫及び微生物の資源について紹介した。「生物資源と農業D」では、農業上重要な資源植物や土壌環境などについて紹介した。

自己点検評価に関しては、農学教育部会が担当した講義の「学生の総合判断」の平均が4.3であったことから、良好であったと判断できる。また、例年通り様々な授業の工夫も見られた。例えば、学生の多様なニーズ、学術の発展動向、社会からの要請等に配慮するため、アンケートなどを実施に翌年あるいは次回の講義に反映させているなどの工夫が見られた。また、本年度からBEEFの導入なども見受けられた。さらに、必ず小テストやレポートを課し、それをもとに成績をつけるという成績の付け方や遅刻者に対する対応など徹底し、以前問題であった各教官間の不均衡も、シラバスに明記することや、最初のガイダンスで伝えることにより是正され、成績評価、単位認定がより適切に実施されるようになった。従って、「適切なシラバスが作成され、活用されているか。」や「成績評価基準が策定され、学生に周知されており、その基準に従って、成績評価、単位認定が適切に実施されているか。」などに関しては、十分できていると判断できる。

一方、本講義はオムニバス講義であるため、講義内容が広く浅くなりがちであるという側面を有している。とくに、本年度からクォーター制が導入されたことにより、各講義のコマ数が減少し、各講義をより均一化することが難しくなった。特に、食と健康A

及びBでは、前期・後期で担当する教官が異なるため、同名の講義でありながら、全く同一の内容で行うことが難しくなっている。しかし、学生のアンケートに見られるように、学生の興味は必ずしも一様でないことから、本講義はかえってオムニバス形式の利点が活かされており、「多様な学習の達成度や満足度に対応できていた」といえる。その一方で、同一講義名にする必然性を有しなくなってきたため、今後は食と健康も「生物資源と農業」同様A～Dにするのがよいのかもしれない。

ただ、逆に、「食と健康」「生物資源と農業」をそれぞれA～Dにすることによる弊害も憂慮される。即ち、一人の学生が農学部会の担当する複数の講義を履修できる可能性である。幅広い知識を学ぶという共通教育の観点からは、1人の学生が農学教育部会の担当するよく似た講義を複数履修することにより、他の講義が履修できなくなるのはできるだけ避けるべきである。実際には、1, 2年生にとって履修できる曜日・時間などに制限があるため、この懸念は杞憂であると思われるが、今後状況をよくみて、1人が履修できるのは、「食と健康」「生物資源と農業」からそれぞれ2つずつにするなどの配慮が必要かもしれない。

さらに、クォーター制導入によるコマ数の減少により、新たな問題も露呈した。即ち、学生の教育実習などによる公欠である。授業担当者の中で、最大でも8コマしかない講義に半分以上欠席した学生は、その講義を履めたことになるのか？、単位を出すべきなのか？などの議論が出された。現時点で、これらの学生を完全に排除することは難しいものの、農学教育部会の講義は出席が重視されることを改めて来年度のシラバスに明記することで、様子を見ることとした。

また、本講義ではレポートを課している授業もあることから、かなり自宅などでの学習を余儀なくされており、それによる学習効果も年々上がっているように思える。また、質問などに関しては、各教官のメールアドレスを公開したり、毎回の小テストの際に質問を記入させ、次の講義で回答するなどの工夫がみられてきてはいる。しかし、アンケートの結果を見る限り、自宅学習時間に関しては講義による偏りは大きいようである。今後、本当に学習意欲がない学生へのアプローチや、学力不足への学生の対応などに関しては検討する余地がある。即ち、「基礎学力不足の学生への配慮等が行われているか」に関しては、課題も残っている。今後、本講義で受講したことにより、食や農産物、あるいはその安全性に興味をもった学生達に、今後も自ら色々なことに興味を持ち、学習して（調べて）いけるモチベーションとその方法をしっかり伝えていく必要があるだろう。

教育部会用自己点検・評価シート（様式1）

項目・観点ごとの記述

基準5 教育内容及び方法

5-1 【教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）が明確に定められ、それに基づいて教育課程が体系的に編成されており、その内容、水準が授与される学位名において適切であること。】

5-1-③： 教育課程の編成又は授業科目の内容において、学生の多様なニーズ、学術の発展動向、社会からの要請等に配慮しているか。

観点に係る状況（150字以上）

配慮している。例えば、レポートやの小テストの際に行うアンケートの結果などを考慮し、学生の多様なニーズに合わせて講義スタイルを修正してきている。また、近年では中国での残留農薬の問題や、福島原子力発電所、食肉偽装、食中毒など、そのときに

タイムリーな話題に関連づけて講義している。実際様々な、学生がそれぞれ異なる講義内容に興味を示している。

根拠資料

シラバス、アンケート、小テストなど

5-2【教育課程を展開するにふさわしい授業形態、学習指導法等が整備されていること。】

5-2-①： 教育の目的に照らして、講義、演習、実験、実習等の授業形態の組合せ・バランスが適切であり、それぞれの教育内容に応じた適切な学習指導法が採用されているか。

観点に係る状況（150字以上）

それぞれの講師において、様々な工夫が認められた。例えば、パワーポイントによる一方向性の講義だけでなく、レポートを書かせ、次の講義で対応したり、コメントを返したり、小テストに対して回答するなど、対話形式の講義を心がけていた。さらに、実際に遺伝子組換えに使用する実験器具を手にしさせるなどの工夫が見られた。しかし、その一方で一方向性の講義で終わったものもある。

根拠資料

小テスト、アンケート、シラバス

5-2-②： 単位の実質化への配慮がなされているか。

観点に係る状況（100字以上）

すべての講師が小テストやレポートを必ず実施し、それをもとに成績をつけている。出席状況や受講態度などの平常点に対する評価も各教官間で不均衡がないよう周知している。また、かつては遅刻者に対する対応などに講師間のバラツキなどがあったが、近年統一性が認められる。

根拠資料

シラバス、アンケート

5-2-③： 適切なシラバスが作成され、活用されているか。

観点に係る状況（50字以上）

学習目標が明確に定められているだけでなく、各講義内容、講義時期、評価方法などが明確且つ端的にまとめられている。

根拠資料

シラバス

5-2-④： 基礎学力不足の学生への配慮等が行われているか。

観点に係る状況（100字以上）

シラバス及び講義中に教官のメールアドレスを公開し、オフィスアワー中に対応しているが、学力不足や学習意欲がない学生などへの対応をとくに行っていない。今後、遅刻や欠席が多い学生などへの呼びかけなどは必要かもしれない。

根拠資料
シラバス

5-3 【学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）が明確に定められ、それに照らして、成績評価や単位認定、卒業認定が適切に実施され、有効なものになっていること。】

5-3-②： 成績評価基準が策定され、学生に周知されており、その基準に従って、成績評価、単位認定が適切に実施されているか。

観点に係る状況（100字以上）
すべての講師が小テストやレポートを必ず実施し、それをもとに成績をつけている。出席状況や受講態度などの平常点に対する評価も各教官間で不均衡がないよう周知している。また、これらの評価基準に関しては、シラバスに銘記されている。

根拠資料
シラバス及び規約

5-3-③： 成績評価等の客観性、厳格性を担保するための措置が講じられているか。

観点に係る状況（100字以上）
評価方法はシラバスに明記されている。さらに、すべての小テストあるいはレポートの点数を責任教官がとりまとめた後、各講師にフィードバックさせ、客観性、厳格性を担保している。また、問い合わせのあった学生には小テストなどの点数や成を公開している。

根拠資料
シラバス、出席簿、成績表

基準6 学習成果

6-1 【教育の目的や養成しようとする人材像に照らして、学生が身に付けるべき知識・技能・態度等について、学習成果が上がっていること。】

6-1-②： 学習の達成度や満足度に関する学生からの意見聴取の結果等から判断して、学習成果が上がっているか。

観点に係る状況（100字以上）
様々な方法で、講義の感想という形でアンケートをとっているが、色々な学生が実に多様な講義に関心及び満足度を示しており、オムニバス形式の講義の利点を最大限に生かすことにより、学習効果が上がっているといえる。

根拠資料
レポート、アンケート

基準7 施設・設備及び学生支援

7-1 【教育研究組織及び教育課程に対応した施設・設備等が整備され、有効に活用されていること。】

7-1-④： 自主的学習環境が十分に整備され、効果的に利用されているか。

観点に係る状況（50字以上） レポートを書かせる、テストを行うなどして、学生の自主的学習を促している。ただ、最近のネット環境にたよる部分も多く、関連図書が図書館に十分に用意されていなかったり、学生の図書館利用率が低いなど改善の余地もある。
根拠資料 成績、シラバス、神戸大学図書館所蔵書リスト

7-2【学生への履修指導が適切に行われていること。また、学習や課外活動等に関する相談・助言、支援が適切に行われていること。】

7-2-①： 授業科目のガイダンスが適切に実施されているか。

観点に係る状況（100字以上） 責任教官が最初の講義において、概要、成績評価方法、遅刻者に対する対応、欠席などの諸注意を行っている。しかし、以前、遅刻者や欠席者もみられることから、十分に単位の取得方法や遅刻の取り扱いなどを理解しているのか疑問が残る部分もある。
根拠資料 シラバス、講義、出席簿

7-2-②： 学習支援に関する学生のニーズが適切に把握されており、学習相談、助言、支援が適切に行われているか。
また、特別な支援を行うことが必要と考えられる学生への学習支援を適切に行うことのできる状況にあり、必要に応じて学習支援が行われているか。

観点に係る状況（100字以上） 学生にニーズに関しては、レポートや先述のアンケートなどにより、ある程度把握できていると思われる。また、学習支援に関しては、参考文献を適時紹介したり、教官のメールアドレスを公開し、オフィスアワー中に対応するなどしているが、さらなる努力も必要かもしれない。
根拠資料 シラバス、講義